

「一九四六」大阪展 開催趣意書

1. 作品「一九四六」と作家について

中国の画家・王希奇（ワン・シーチー）氏が制作した巨大油絵《一九四六》は、縦3メートル・横20メートルにおよぶ大作です。敗戦翌年の1946年に中国・遼寧省葫蘆島（ころとう）港から日本へ「引揚げ」に向かう約105万人の人々の姿が、約7年の歳月をかけて描かれました。

敗戦時、旧満洲（中国東北地域）には約155万人の日本の民間人が取り残されていたと推定されています。この作品は、それらの人びとの「引揚げ」という歴史がもつ、侵略と支配の歴史の中での無数の苦難を想起させると同時に、極限状態で懸命に生きた人々の命の尊厳を描き出しています。群像の一人ひとりが内面から発する光のように描かれる「ホタル式」と呼ばれる独自の手法は、鑑賞者に深い感動と平和への祈りを呼び起こします。

作家の王希奇氏は葫蘆島に隣接する錦州の出身で、魯迅美術学院教授を経て現在は大連芸術学院特任教授を務めます。《三国志・赤壁の戦い》（合作）、《長征》や同じく三国志の《官渡の戦》など多くの歴史を題材にした大型絵画作品が中国美術館、中国国家歴史博物館、中国国家軍事博物館などに収蔵され、東洋の墨絵の要素と西洋油絵の技法を融合させた独自の画風で知られ、歴史画の大家として高い評価を受けています。

2. 大阪展開催の意義

本作は2017年の東京展を皮切りに舞鶴、仙台、高知、神戸、長野、米子、福岡など全国各地を巡回し、世代や国境を超えた共感を集めてきました。このたび大阪展実行委員会は、2027年4月に豊中市立文化芸術センターで開催を予定しています。本展には、以下のような普遍的かつ大阪独自の意義があると考えます。

第一に、歴史認識の共有と対話の促進です。引揚者を多く受け入れた歴史を持ち、現在も多様な文化が共生する大阪だからこそ、過去の人道協力と現在の多文化共生、未来の平和構築を結びつける「記憶外交（Memory Diplomacy）」の場を創出できます。

第二に、世界で続く紛争と難民問題への警鐘です。作品に描かれた姿は過去の出来事ではなく、現代の現実と重なります。平和は与えられるものではなく、市民一人ひとりが主体的に守り続ける努力であることを、この絵は静かに問いかけています。

第三に、芸術による社会教育の可能性です。沈黙の力を持つ絵画は、言葉を超えて観る者の内面に届き、世代や国籍を超えた共感を生み出します。

第四に、「民間の信頼資本」の構築です。政治情勢に左右されない市民レベルの交流を積み重ねる「草の根の平和構築」を、本展は具現化します。

第五に、国際社会への学術的発信です。葫蘆島の人道協力は国際的にも稀有な事例であり、本作は美術史・戦後史・日中関係史を横断する貴重な視覚史料です。大阪展では学術講演会も企画し、国際社会への人道協力モデルの発信と教育界との連携を目指します。

3. 結び

《一九四六》は単なる過去の記録ではなく、人類が未来へ向けて考えるべき普遍のメッセージを内包しています。大阪からのこの発信が、多くの市民の心に響くことを願ってやみません。

以上